日本医史学雑誌第三十四巻第二号
昭和六十三年四月三十日発行

医史学と私

服部敏良

私と医史学の出会いは一兵士との奇縁にはじまる。大東亜戦争がはじまって間もない頃、軍は「うちてしやまん」という標語を掲げて、国民の士気高揚につとめていた。当時私は応召軍医として岐阜の連隊に勤務していた。昭和十七年の一月中頃だったと記憶している。ある日、一人の兵士が私の部屋に来て、「軍医殿、『うちてしやまん』という標語は『古事記』から出ているそうですが、本当ですか」と尋ねた。その頃私は『古事記』などまだ読んだこともなかったが、軍医の体面上そんなことは知らないとも言えず、つい、「うんそうだ」と答えてしまった。兵士はやっぱりそうかと安心したような顔をして帰って行った。しかし、落ち着かないのは私である。いかにも知ったか振りをして返事をしたものの果してそうか心配でたまらない。帰途、早速本屋に立寄り、『古事記』の註釈書を買い求めて読んでみた。幸い「うちてしやまん」という言葉のみえる歌が何首か出てきた。ヤレヤレ、これで安心と私はホッとした。多くの歌の中でも次の一首は今でも覚えている。

みつみつし　久米の子等が、垣下に、植えしはじかみ、口ひびく、吾は忘れじ、うちてしやまん

こうして「うちてしやまん」の標語の出所は一応解決した。しかし、せっかく『古事記』を読み始めたことでもあり、最後まで目を通そうと思いたった。拾い読みしている中に、いろいろ当時の医学に関係した記事があることに気付いた。そこでさらに、『日本書紀』や『旧事記』にまで目を通し、これらの中から医学に関係する記事を抜萃して、「上古史医事

考」という小論文をまとめてみた。これを医学雑誌に投稿したが、どの雑誌社も「当社には不向き」といって返送してきた。しかし、これが最後と思ってある雑誌社へ出したところ、意外にも当時東京大学医学部教授であった三澤敬義先生から「君の論文は一般医学雑誌には不向だから、専門雑誌に載せるようにした」というお便りを頂いた。やがて、それが昭和十八年二月号の『日本医史学雑誌』に「上古史医事考」として載せられた。これが契機となり、私は医史学とかかわりを持つようになったのである。

まもなく軍務を解かれた私は、診療のかたわら奈良時代の医学について興味の赴くまま史料を集めて小論文を書いてみた。昭和十八年の秋、奈良室生寺の見学会があり、一宮の友人と共に私もこれに参加した。講師は京都の美術史の権威森暢先生であった。先生から仏像や建築などについて詳しい話を承り、見学後門前の茶店に休憩し雑談に話を咲かせていた。その折、私は奈良時代の医学について小論文を書いたこと、さらに文化史の立場から何か御教えを頂くことはないかと申し上げた。先生もこれに興味をもたれたらしく、その後先生のお力添えで『奈良時代医学の研究』として京都桑名文星堂から出版の話がまとまった。いろいろの曲折を経て漸く初校を終えたばかりの昭和十九年十一月、私は再度の軍務公用の命に接し広島へ向かうこととなった。このままではとうてい出版なども不可能なこととあきらめていたとき、出征後の出版について一切の面倒をみて下さったのが、当時、東京高等師範学校教授の木代修一先生であった。私は先生の著書『日本文化史図録』を通じていろいろお教えを受けていた。また直接先生から何かと御教示をうけ、先生の御温情にすがっていたときであった。

応召後、私は広島から台湾へ、再び広島へと戻って軍務に服していた。やがて二十年八月六日、広島に人類はじめての原爆が投下された。幸い私は事無きを得たが、広島は一瞬の中に焼野ヶ原と化した。死屍は累々と道路に横たわり、その悲惨さは目をおおうばかりであった。私は毎日毎日こうした被爆者の手当に追い廻されていた。

そうした九月のはじめ頃、京都から小包が届いた。開いてみるとそれは私の著書『奈良時代医学の研究』であった。打

続く戦火の拡大に都市はつぎつぎと灰燼と化し、もはや出版など絶望とあきらめていただけに、この書を手にした私の驚きは甚だしかった。眼頭がジーンとなるのを覚えた。原爆で助かったことよりも、この書を手にした時の私の感激ははかり知れないものがあった。奥付をみると昭和二十年七月三十日発行となっている。まさに旧日本帝国最後の書ともいえるだろう。この書に接して私は、「ヨシ、これからはこの仕事に一生をかけて頑張ろう」と心に誓った。

このように私の処女出版である『奈良時代医学の研究』は一兵士との奇縁にはじまり、森、木代先生、桑名文星堂と多くの方々の善意によってはじめて世に出たのである。しかも大東亜戦争、原子爆弾、日本敗戦という世紀の大事件の中に出版されたものだけに私には生涯忘れ得ぬ思い出の著書となった。

戦争も漸く終り平和な日々が戻ってきたものの、敗戦によるみじめさは目もあてられぬものがあった。物資の欠乏、とくに食糧難や交通難は日ましに激しく、ノミやシラミがうようよとはい廻り、冬が近づいても暖房など思いもよらず、実にこの世の地獄さながらの生活がはじまった。

こうした生活の中で診療のかたわら、平安時代の医学の研究に手をつけたのである。私はまず当時の多くの物語、たとえば『栄花物語』・『枕草子』・『源氏物語』・『大鏡』等について、その中に記されている多くの病気や治療法などを検討すると共に、当代末期に描かれた『病草紙』についても医学的検討を試みた。さらに当時唯一の医書ともいうべき『医心方』を基にして当代医学の概要あるいは当時の医療制度などを調べ、昭和三十年三月『平安時代医学の研究』と題し、桑名文星堂から出版した。本書の巻頭には新村出、高木市之助の両先生から身に余る序文を、また、老後にはいろいろ御指導を賜った木代修一先生から懇切な跋文をいただき錦上花を添えることができたのはまことに望外の喜びであった。

なお、本書について後日、土田直鎮先生から「ユニークな著書ではあるが、古記録の渉猟が足りない」との御指摘をうけた。

何分にも終戦直後のこととて各地の図書館や研究所などはまだその機能を十分に発揮しておらず、また交通難も甚し

く、地方に住むわれわれには古記録の渉猟など思いもよらぬことであった。したがって、このような批評も当然のことと有難く甘受していた。その後世情もだんだん旧に戻り、古記録なども次々と刊行されるにおよんで私は土田先生の御指摘に応えるため、これら古記録を中心としての当代の疾病の解説を試み、同時にこの時代の天皇や藤原貴族等の病状などを調べ、これを『王朝貴族の病状診断』として昭和五十年七月、吉川弘文館より刊行したのである。『栄花物語』の権威、松村博司先生から御懇篤な跋文を頂くことができたのは無上の光栄である。

本書では、まず一部の人々により狂気の天皇と誤解されている冷泉・花山天皇の病歴を仔細に検討し、然らさることを明らかにした。

また藤原貴族の代表者ともいうべき藤原道長が一家三后の栄を誇り、わが世の春を謳歌した五十三歳の頃、道長は健康どころか、糖尿病や白内障にかかり、さらに胸病という特殊な神経性疾患に悩んでいたのである。

また、道長の他、大勢の貴族も当時「もののけ」や「風病」あるいは「飲水病」等いろいろの病気に罹っていた事を知り、これらの病気について解説を試みた。

さらに昭和四十三年四月、第十七回日本医学会総会が名古屋で開催されたとき、記念事業として関戸家所蔵の国宝「病草紙」が展観された。さらにこれを原色版巻子本として上梓されたが、その折私はその医学解説を委嘱された。

かくて平安時代の医学は『平安時代医学の研究』と、『王朝貴族の病状診断』により、ほぼその全貌を把握し得たものと思っている。

次いで私は鎌倉時代の医学について考究の歩を進めることとした。当代の代表的医書といえば梶原性全の著わした『頓医抄』及び『万安方』であるが何れも秘府に蔵され、容易にこれをうかがうことができない。幸い内閣文庫福井保氏及び宮内省書陵部平林盛得氏の御好意により、その全文をマイクロフィルムに収め、その全容を知り、これを現代医学の面より検討することができたのは何よりも有難いことであった。さらに当時の公卿、僧侶、歌人等の日記により当時の医学の

実体を知ることができた。

さらに当時の時代史の中でとくに私の興味をひいたのは、源氏がどうして僅か三代という短い年月に亡びたのかということである。これはただ政治状勢の変化などということでは解決し得る問題ではない。むしろ頼朝の妻政子の存在が、その一因をなすものではないか、政子に何か性格的な欠陥があったためではないかと考えるようになった。

従来、史家の中には政子を偉大な政治家として賛美し、しかもよく婦道を守った良妻賢母であった如くに喧伝している。もし、本当にそうであったなら、どうして源氏の一族があのように無惨な死を遂げ、跡を断つに至ったのか理解し得ないことである。

このような観点から私は政子には常人と異なる性格が潜んでいたのではないかと考えざるを得なかった。そこで私は鎌倉時代史の権威龍粛先生の御意見を伺ったところ、先生からいろいろ御教示を賜ったが、中でも「歴史はただ史学者だけではなく、各方面の多くの人々の意見を取り入れ、これを総合して一つの立体像を組立て観察することが大切である。そういう点で医学の面から政子をみることも重要なことである」といわれ、私の政子観もまたそれなりに価値のあるものであると励まして頂いた。こうした龍先生の御教示や多くの先学の士に導かれ私は『鎌倉時代医学史の研究』として吉川弘文館より昭和三十九年十一月上梓することができた。巻頭には高木市之助、中村直勝先生の序文を頂くことができたのは、まことに光栄の至りである。

幸い本書は各方面に反響を呼び、昭和四十年五月には、中部日本新聞（現中日新聞）より、「中日文化賞」を授与され、同年十一月には、日本医師会より「日本医師会最高有功章」を頂くことができた。また四十二年四月、日本医学会総会が名古屋で開かれた折、医史学会特別講演には「町医者としての本居宣長と上田秋成」と題して語った。

さらに、昭和四十三年七月、名古屋黎明書房より『釈迦の医学』を上梓した。周知のごとく釈迦在世時のインド文化はおおいに発達していたが、ことに医学の進歩はめざましかった。当時すでに開腹術や開頭術が無痛手術で行われていたこ

とが『四分律』やその他の御経の中に記され、また、今日われわれが日常衛生法として遵守している含嗽、歯磨、手洗、その他万般の事が当時釈迦によってやかましく教えられていた。いうまでもなく釈迦は医師でもなければ医術を学んだわけでもないが、釈迦の大智・大徳はよくこれらの医学を取り入れて自家薬籠のものとし多くの弟子にこれを教え、病気の治療や予防に役立たせたのである。私が敢えて『釈迦の医学』と題したのもこの故に他ならない。

室町時代から戦国時代を経て安土、桃山に至る時代は政治・社会・文化等のあらゆる面で近代文化をつくり出す胎動期であった。医学もまたそれにつれて発達した。とくに打続く戦乱は多くの負傷者を出し、金創医の発達を促し、近代外科学の基礎をつくったが、さらにこれに拍車をかけたのはキリスト教の伝来と共にわが国にもたらされた西洋医学、ことに外科学であった。また眼科・産婦人科等の専門分科も発達をみた。

さらにこの時代には多くの公家、僧侶が自己防衛の手段としてか医学に深い関心を示し、彼等の日記や記録の中には当時の医学に関する記事がきわめて多く記されている。

これらの記事は国文学や国史の面からは医学の領域として注目されず、また、医学からは国史や国文学の部門として見逃されてきた。いわば山の谷間に咲く花の如く、両者から見捨てられていたもののようであった。私はこれに注目し、これらをよく検討することによって当時の医学の実態を知ることができた。

さらに時宗の僧侶が従軍慰問使や従軍僧として活躍し、また赤十字活動の基ともいえる敵味方の区別なく治療を行っていたことなどを知るとともに、この時代、戦争がはじまると医師を徴用し軍医として戦場に駆り出すことなども僧侶の日記に記されていることがわかった。

また当時の為政者ことに将軍の中には性格に大きな変化を生じ、後世の人々の批判の対象となる行動をした者も少なくなかった。ことに足利義満・義教・義政の行動には常人として律し難い異常なものがあり、彼等の性格変化がわが国の政治・文化に大きな影響を与えたことを知ることができた。

麻のごとくに乱れた戦国の世も織田信長によって漸く統一されたかの如くにみえたが、信長は不幸明智光秀のため敢えない最後をとげ本能寺の露と消えた。

いったい、光秀が何故信長に逆心を抱いたのか、今日までその原因は謎とされている。一説には日頃信長に恨みを抱き、その恨みを晴らすためといわれ、また、一説には戦国武士の慣しとして天下取りの野望を達成せんがためとも、また信長の貪欲、無情冷酷のためなどと諸説があげられているが、何れも必ずしも当を得たものとは言い得ない。したがって光秀には史家の手に及び難い何かの原因があるのではないか、それはむしろ光秀の性格に起因するものではないかと私は考えるようになった。かくて私は光秀の性格を調べ、彼が抑うつ性性格の持主であり、このようなものの暴発的発作的凶行が信長を死にいたらしめたもので、その誘因となったのは性格、教養をまったく異にする秀吉の存在であろうと考えるようになった。もとより私の一私見に過ぎないが、吉川英治氏も、

明智光秀のような武門中の文化人であり悧巧者であった人間が、なぜ三日天下のような馬鹿を敢えてやったかというようなことも、四囲の史的条件だけでは判断がつかない問題である。光秀の健康診断がはじめて謎を解くものだとおもう（『随筆新平家』）

と説いている。

また、クルト・シュナイデルは、

抑うつ性型の人が時に大きな精神的衝撃を受けると、心の中に潜在していた疑念や被害感情が爆発的に働き、夢にも考えていなかった人に向かい、たちまち発散することがある（『精神病質人格』）

と説いている。

私はこのような事を『室町・安土・桃山時代医学史の研究』として一書にまとめ昭和四十六年十一月、吉川弘文館より上梓した。

江戸時代の医学は漢方、オランダ医方と東西に別れ、漢方にも後世方派、古医方派あるいはその中間派があり、これらについては既に多くの先達により詳細に研究されているので、私は屋上屋を重ねるの愚を避け、従来留意されなかった諸点について考究を進めることとした。

江戸時代には儒学と医学とは密接な関係にあり、儒者として医師を兼ねるものも少なくなかった。しかし儒者の一部には「儒は国を治むるの大道にして君子の学ぶべきもの、医は報を求めて技を売るの小道なり」として医を蔑視する風があり、ために無学の医師の中には、無学をかくすために儒者の如くに振舞い世の信用を得て報酬をむさぼろうとする者が現れ、儒者からは儒医として顰蹙され排斥される者も少なくなかった。もちろん、このような無学、破廉恥のものばかりでなく医師にして儒を治め医道を全うしたものも多かったのはいうまでもない。また儒者にして子弟愛のため自ら医を学び子弟に医を教えて立派な医師を養成した中江藤樹・帆足萬里の如きすぐれたものもあった。

また、本居宣長・平田篤胤の如く医師を本業としながら国学に精進したものもあり、あるいは橋本左内・佐久間象山のごとく優秀な蘭方医家でありながら維新の志士として活躍し、若くして刑場の露と消えたものもあった。これらの人はやもすれば国学者、儒者、維新の志士としての名声のため本来医師であったことすら忘れられんとするおそれがあり、私はこれらの人々の医師としての業績を明らかにすることにつとめた。

また、江戸時代は文教政策の普及により庶民の間に読書が盛んとなり多くの物語、草子類が発行された。これらの中には医学についての記事も多く記され、時には医師・僧侶の無智にもとづく失敗談や破戒行為が小咄・笑話の材料となり庶民の喝采を博したものも少なくなかった。こうした物語などに記された医事に関する話は当時の庶民の医事観を知る絶好の史料でもあった。

また当時の人々の記録や日記なども精細をきわめ、病歴なども詳しく知ることができるようになった。これによって家康をはじめとする歴代江戸将軍、あるいは芭蕉・良寛・滝沢馬琴等の武人・文人・僧侶等の病歴を調べ、現代医学の面か

ら観察することもできた。

このような種々の面から検討したものを『江戸時代医学史の研究』として昭和五十三年九月、吉川弘文館より刊行した。

なお、さきに上梓した奈良・平安時代医学の研究は何分にも戦中、戦後の世情不安、物資不足の状況下の記述のため、誤植も多く内容にも不備の点少なからず、これを補正し、書名も新しく『奈良時代医学史の研究』、『平安時代医学史の研究』と改題し、さきに刊行した『鎌倉時代医学史の研究』・『室町・安土・桃山時代医学史の研究』・『江戸時代医学史の研究』とを一括し『日本医学史の研究』と題し、昭和六十三年五月吉川弘文館より上梓されることとなった。

これで一兵士との奇縁にはじまった私の医学史研究も漸く終止符をうつことができたのは私の無上の光栄であり、喜びとするところである。

なお、私は明治、大正時代を通じ著名人の死因を考究し、『近代諸家の死因』として昭和六十一年七月、吉川弘文館より刊行した。実は明治時代著名人についてその出自、業績などは人物事典やその他の記録によって容易にこれを知り得るが、いかなる病気で死亡したのか、その病歴はとなるとまったくわからない。このため私は当時の新聞や多くの記録に基づいて、これを明らかにすることにつとめた。さらにその補遺として五十余名の人々の死因その他諸種の医薬品についての検討を集めて『医学史研究余録』と題し昭和六十一年七月、吉川弘文館より上梓した。

この他医学史関係の著書として、私は昭和五十六年十月、『日本医学史研究余話』を科学書院より刊行したが、これは諸種の雑誌・新聞等に寄稿した医学史関係の論文を収録したものである。なお、医学史一般については近藤出版社より日本史小百科の一片として『医学』と題し昭和六十年五月刊行した。

以上、医史学と私との触れあいについて略述した次第である。

（愛知県一宮市）